

ニ菌毒ヲ體內ニ注入スルハ、時ニ有害ナラスヤ、Raetemann & Brock (Arch. Int. Med. 1919, May)ハ無効ナリト宣ス

Cunha (J. A. M. A. Vol. 72, No. 9, p. 689)ハ咯痰液ヲ「ワクチン」トシテ注射スレハ有効ナルヘキヲ説ク即チ咯痰中ニハ未知病原體ヲ含有スルモノトスル前提ニヨル

第四項 看護上ノ注意

安静

安静ハ本病殊ニ肺炎ヲ誘起セル場合ニ於ケル治療法ノ第一義ナリ、此レ諸家ノ等シク痛感スル所ニシテ患者ヲ病院ニ運ブ事ノ如キモ大イニ熱慮スヘキ所ナリ、肺炎ヲ起シタル時ハ臥床ノ交換サヘ躊躇スヘシ、有熱時ノミナラス下熱後モ一定時安静ヲ守ルノ要アリ、ソハ下熱後ニ肺炎勃發又ハ再發ヲ見ルコトアレハナリ、患者ノ位地轉換ニハ十分ノ注意ヲ拂フヘク此レニヨリ呼吸困難増シ「チアノーゼ」強クナルコトアリ

温包ト温氣並ニ温度

「インフルエンザ」患者ハ寒冷ニ逢ヘハ惡影響ヲ蒙リ易キヲ以テ患者ハ身體ヲナルヘク温カニ保テ、室温ハ能フヘクシハ華氏六十度乃至六十五度位ニ保ツヘシ、然レトモ此レ我國ノ住宅ニテハ冬時ニハ室温ヲ六十度ニ保タンコト一般ニハ望ミ難キコトナルヲ遺憾トス

又室内ニハ蒸氣ヲタシメ温度ヲ充分ナラシムヘシ、換氣ノ際モ寒冷ヲサクル様留意アリタシ、患者ヲ一定ニ隔離スルコトハ豫防上並ニ交互傳染防止ニ意義アル外室内空氣汚染ヲ防ク目的ニテ甚タ望マシキコトナリ

食事

肺炎ヲ起セル時ハ流動食トナシ瓦斯ノ發生スルモノヲ避クヘシ、横隔膜ヲ舉上シ呼吸困難ヲ起スコトアレハナリ

飲料ハ成ル可ク多量ニ與フヘシ、此レニヨリ尿量ヲ増シ毒素排泄ヲ促カス、場合ニヨリ點滴注射ヲナスヘシ

Yanner (Korr. 1919)ハ特ニ熱湯ヲ多量ニ與フヘキヲ説キ Kantsky (Med. Kl. 1919, No. 3)ハ此ノ目的ニ向ツテ多量ノ茶ニ砂糖ヲ多クトカシテ與フルコトヲ推選セリ、之レ利尿ト同時ニ榮養攝取ノ目的トナルナリ

附 内務省ノ質問ニ對スル諸家ノ治療ニ關スル回答

嘗テ本省ハ本病ノ豫防、治療ノ適當ナル方法ニ關シ學者、臨床家等ノ意見ヲ求メタルカ治療ニ關スル回答概要左ノ如シ

氏名 療法

- 一、小林和三郎 生理的食鹽水血管内注射
- 二、吉田恒藏 安静、新鮮ノ空氣、解熱劑制限、カルチニウム劑
- 三、堤 積造 硫苦内服
- 四、村尾信雄 「レミヂン」
- 五、渡口精鴻 治療血清、自宅療養獎勵
- 六、遠藤大太郎 「キニーネ」

- 七、杉本宇吉 「キニーネ」
- 八、岩井誠四郎 「インフルエンザ」血清「ヂフテリー」血清
- 九、福岡盛獄 「カミルレン」
- 一〇、工藤大助 「ツベルクリン」千倍〇・二」
- 一一、佐々木秀一 安静
- 一二、工藤貞雄 免疫血清
- 一三、溝口耕治 「コロイド」銀
- 一四、見止春海 「インフルエンザ」血清
- 一五、野田謙俊 「バントボン」抱水「コロラール」アドレナリン
- 一六、莊司勇助 免疫血清、解熱劑制限
- 一七、堀澤治吉 「レミジン」
- 一八、氏原均一 「アルカリ」療法、肺炎菌血清
- 一九、大桶 弘 「キナ」皮、桂皮、茴香
- 二〇、山本達吉 「クロールカルシウム」静脈内注射、興奮劑
- 二一、内田孝徳 「ヂフテリア」血清
- 二二、片倉病院 銀「エレクロイド」インフルエンザ「菌感作」ワクチン
- 二三、好生館醫事研究會 早期解熱劑禁止、安静、カンフル「ア」持續的使用
- 二四、加藤清一 絶対安静、鹽規、強心劑、五%「クロールカルシウム」注射、肺炎ニ對シ
- 二五、齋藤友次郎 「ワクチン」療法、強心劑

- 二六、宮下耕圃 解熱劑禁止、強心劑使用
- 二七、大島 仁 解熱劑嚴禁、強心劑常用、肺炎初期ニ「カラシ」泥、酸素吸入
- 二八、林 信次 「カンフル、エーテル、オレーフ」油
- 二九、程谷紡織工場 食鹽水「リソゲル」液「カルチニウム」液
- 三〇、柳澤光二 「エレクトラゴール」
- 三一、柳川史郎 鹽規
- 三二、山極勝三郎 安静
- 三三、中村寅三郎 「ヂフテリー」血清、健康血清、病室溫度注意
- 三四、大野效作 安静
- 三五、小笠原 豊 安静、便通
- 三六、伊藤英逸 解熱劑ヲ用ヒサルコト
- 三七、鈴木慶之助 酸素吸入、安静、強心劑、食鹽水
- 三八、阿部繁夫 「バイフェル」免疫血清
- 三九、澁村主税 酸素吸入、強心劑
- 四〇、佐藥要人 看護
- 四一、北野豊治郎 「バイフェル」ワクチン
- 四二、村尾信雄 「レミジン」
- 四三、實吉純郎 「コロイド」銀
- 四四、森田資孝 「キニーネ」劑、混合血清

- 四、田澤 録二 脚氣患者ノ流感患者ニハ糖エキス
- 五、北里 研究所 「インフルエンザ」菌血清肺炎双球菌血清
- 六、栗田 松 稔 恢復患者血清「アルカリ」型、エレクトラルゴール
- 七、阿部 益之助 安靜、溫度、心臟型、リンケル「液、酸素吸入混合血清
- 八、渡邊 惣五郎 安靜、下劑、強心劑、混合血清、酸素吸入
- 九、横須賀 衛戍病院 「アルカリ」療法、コロイド「銀、血清療法
- 十、高岡 榮 安靜、コロイド「銀、鹽規
- 十一、谷 徳次郎 恢復患者血清
- 十二、宮尾 海軍中尉 早期下劑施與
- 十三、久能 銳彦 「デフテリ」恢復患者血清
- 十四、吉永 福太郎 「アルカリ」療法
- 十五、小野寺 直助 血清
- 十六、青柳 彰 安息香酸、ナトリウム、カフェイン
- 十七、馬上 金山 濃厚食鹽水、靜脈内注射
- 十八、松田 毅 玉子酒、橙油
- 十九、吉田 正一

第五節 流行性感冒ノ豫防

第一項 豫防ノ概況

「インフルエンザ」ノ流行ハ世界到ル所ノ民族ヲ襲ヒ、凡テノ社會的階級ヲ冒シ、其罹病率ト死亡率ト共ニ頗ル大ナルヲ以テ、之ヲ豫防法策ヲ講スル事ハ凡テノ國民ニ向ツテ焦眉ノ急務ナリキ。然レトモ「インフルエンザ」ノ「パンデミー」ハ久シク其跡ヲ絶チ、其病原ノ研究モ不完全ナル儘ニ放置セラレシ觀アル本病ノ豫防法カ突差ノ間ニ完成セラレヘキノ理ナク、各國只能フ限リノ手段ヲ採レルニ過キス。況ヤ今回ノ流行ニ際シテ行ハレタル病原ノ檢索ハ却テ「アイフェル氏」インフルエンザ「菌」ニ向ツテ新タナル疑義ヲ生シ、未タ學界ノ歸趨ヲ確言スルヲ得サル状態ニアリ。即チ吾人未タ病原ヲ明ニ知ラサルナリ。病原ヲ知ラサルカ故ニ其ノ性狀ヲ檢査スル能ハス。其傳染ノ徑路ヲ詳ニスルヲ得ス。從テ之ヲ豫防杜絶スルノ途モ亦暗中摸索ヲ免レサリシハ又已ムヲ得サル所ナリ

「インフルエンザ」ノ流行ニ關シテ明ナル點ハ、第一其ノ急性傳染病ナル點ナリ。第二病毒ハ主トシテ呼吸道ヲ犯シ、病毒ノ感染及排泄共ニ氣道ニ因ルコト、第三病毒ノ感染ハ主トシテ接觸ニヨリテ行ハレ、所謂飛沫感染最モ重要ナルコト、第四人類ノ病毒ニ對スル感受性ハ頗ル高キコト、第五人類ノ感受性ニ甚シキ差等アルコト、第六病原ノ毒力ハ變化スルコト、第七本病ニ一定度ノ免疫アルコト、第八氣候ト流行トニ一定ノ關係アルコト等ナリ。以上ハ疫學的考察、臨床上ノ經驗、病理解剖上ノ所見等ヲ綜合シテ自ラ生シタル知見ナリ

學者ノ知ルヲ要スル點次ノ如シ。第一、「パンデミー」ノ來ル理由。第二、病原。第三、病原體ノ性狀殊ニ其ノ抵抗力。第四、病原體傳播ノ方途。第五、免疫性

「パンデミー」發生ノ理由ハ不明ナルヲ以テ之ニ備フルコト能ハス。又地方的流行ノ「インフルエンザ」探疾忠ト「パンデミー」トノ關係モ明カナラス。病原ノ何者ナルカヲ確知セスシテ其各種

ノ性狀ヲ知ルハ難シ。殊ニ人體或ハ動物ニヨル實驗的研究殆ト不可能ナル本病ニ於テ、其ノ性狀ヲ究ムルコト至難ニ屬ス。即チ「インフルエンザ」ハ現代醫學ヲ超越セル部分多ク、之ニ向ツテ實驗的研究ヲ行ヒ、豫防法策ヲ確立スルコトハ甚タ難事ナリ。豫防法ヲ考察スルニ際シテハ、一而他ノ傳染性疾患ヲ模シ、最善ノ法ヲ求メタルニ相違ナキモ、例ヘハ患者ヲ隔離セントシテモ、其ノ病毒保有ノ期間ヲ明ニセス、消毒ヲ行ハント欲シテ其ノ抵抗性ノ如何ヲ知ラス。畢竟不確實ナル知識ヲ基礎トシテ行動セサル可ラス。

「インフルエンザ」ノ流行開始以來各國ノ執レル豫防法ハ大體ニ於テ從來ノ法定傳染病ニ準シテ病毒傳播ノ途ヲ杜カントスルニアリ。然レトモ罹病ノ殆ト普遍的ニシテ、其ノ重症化スル要件ノ不明ナルカタメ、法定傳染病ノ法規ヲ其ノ儘適用勵行スルハ事情ノ許ササルモノアリテ、各國自ラ其ノ實情ニ適應シテ寬嚴ノ程度ヲ加減シタル觀アリ。又病毒蔓延ノ範圍甚シク廣汎且ツ其ノ速度迅速ナルヲ以テ豫防措置モ多クハ徹底スルノ逸ナキ憾多ク、從テ的確ナル豫防法ハ未ダ決定セララルニ至ラス、人ヲシテ或ハ豫防不能ノ疾患タルノ懼ヲ抱カシムルニ至レリ。各國ニ於テ施行セル豫防法ノ極要ハ已ニ別項ニ掲ケタルヲ以テ此處ニハ各國ヲ通シテ略共通セル豫防手段ナル「ワクチン」「マスク」及「含嗽」ノ三ニツキテ少シク蒐メ得タル材料ヲ掲ケントス。

第二項 流行性感冒「ワクチン」

一、流行性感冒「ワクチン」ノ成分(處方)
流行性感冒ノ豫防(若クハ治療)ノ目的ヲ以テ使用セラレタル「ワクチン」ハ其種類甚タ多ク今試ニシテノ數例ヲ舉レハ次ノ如シ

一、「インフルエンザ」菌ノミヨリ成ルモノ

1. 北里研究所製造

加熱「ワクチン」 一 c.c. 〇・五瓩
感作「ワクチン」 一 c.c. 〇・五瓩

2. ロンドン、パーク、デビス會社製

一 c.c. 一億個
一 c.c. 五億個
一 c.c. 十億個

3. リーリー氏「ワクチン」

一 c.c. 八億個

4. エイダブリュー、ウイリアムス氏

5. アール、ピールリング及ヨセフ氏

二、肺炎双球菌ノミヨリ成ルモノ

1. パークデビス會社

一 c.c. 二千萬個
一 c.c. 五千萬個
一 c.c. 二億個

三、混合「ワクチン」

1. 傳染病研究所製

肺炎双球菌(數型多種)

〇・二疔

「インフルエンザ」菌

〇・二疔

2. ジーダブリューマックコーイ氏 (G. W. McCoy)

「インフルエンザ」菌

五億個

肺炎双球菌 一型

五億個

二型

五億個

三型

五億個

四型

十五億個

溶血性連鎖球菌

十億個

黄色膿毒性葡萄球菌

五億個

3. ロゼナウ氏 (Rosman)

肺炎双球菌

一型

十五億個

二型

二十七億五千萬個

三型

三十五億個

四型

十二億五千萬個

「インフルエンザ」菌

五億個

連鎖球菌

五億個

溶血性連鎖球菌

十億個

4. Minkler & Irvine

「インフルエンザ」菌

五十億個

肺炎双球菌

七十億個

溶血性連鎖球菌

一億個

5. 英國 War Office

「インフルエンザ」菌

三千万—六千万個

肺炎双球菌

十億—二億個

連鎖球菌

四千万—五千万個

6. Eyre & Zowe

肺炎双球菌

連鎖球菌

「インフルエンザ」菌

葡萄球菌

加答兒性球菌

B. Septus

7. J. H. Cumpston 其他

A. 「インフルエンザ」菌

二千五百萬個

加答兒性球菌

二千五百萬個

肺炎双球菌

一千萬個

- 連鎖状球菌 一千万個
- グラム陽性双球菌 一千万個
- 8. B. [インフルエンザ]菌 一億二千五百萬個
- [カタル]性双球菌 一億二千五百萬個
- 肺炎双球菌 五千萬個
- 連鎖状球菌 五千萬個
- グラム陽性双球菌 五千萬個

G. H. G. Cary

- [インフルエンザ]菌
- 肺炎双球菌
- 連鎖状球菌
- 葡萄状球菌
- 加答兒性球菌
- 肺炎桿菌

10. 英國衛生局

- [インフルエンザ]菌
- 肺炎双球菌
- 連鎖状球菌

11. ロンドン、パークデビス會社製

- 一、感冒及肺炎[ソクチン]
- a. 加答兒豫防[ソクチン]
- [インフルエンザ]菌 三億個
- 肺炎双球菌 五千萬個
- 連鎖状球菌 千二百萬個
- 加答兒性球菌 一億個
- 肺炎桿菌 一億個
- 葡萄状球菌 一億個
- B. Septus 五千萬個

- 二、感冒混合[ソクチン]
- [インフルエンザ]菌 三億個
- 肺炎双球菌 三千萬個
- 連鎖状球菌 千二百萬個
- 加答兒性球菌 三千萬個
- 肺炎桿菌 五千萬個
- B. Septus 五千萬個
- 葡萄状球菌 三億個
- 三、混合流感[ソクチン]
- [インフルエンザ]菌 一億個

- 肺炎双球菌 一億個
- 連鎖状球菌 一億個
- 四流感ワクチン「陸軍式」
- 「インフルエンザ」菌 六千萬個
- 肺炎双球菌 二億個
- 連鎖状球菌 八千萬個
- 12 1918, 13, Nov. Royal Society of London (Dr. W. E. Carnegie Dickson)
- 連鎖状球菌
- 葡萄状球菌
- 肺炎双球菌
- 「インフルエンザ」菌
- フリードベルゲル氏菌

他菌(加答兒性球菌其他)

- 上述ノ如ク「ワクチン」製造ニ用ヒラレタル菌株モ亦頗ル多ク列舉スレバ次ノ如シ
1. バイフェル氏「インフルエンザ」桿菌
 2. 肺炎双球菌 一十四型
 3. グラム陽性双球菌
 4. 連鎖状球菌
 5. 葡萄状球菌

6. 加答兒性双球菌
 7. 肺炎桿菌
 8. B. Septus 等

流行性感冒ノ流行期ニ於テ府縣及民間ニテ製造セラレタル「ワクチン」ノ種類及用量等ヲ表
 記スレハ左ノ如シ

府縣	「ワクチン」ノ種類	含有菌名	含有菌量中	用 量 (豫防用)
神奈川縣	インフルエンザ菌感受作ワクチン	「イ」菌	〇・二五	一回一〇五
鹿島縣	インフルエンザ菌ワクチン	「イ」菌	〇・五五	一回〇・五五 二回一〇五
兵庫縣	インフルエンザ菌ワクチン	「イ」菌	〇・二五	一回〇・五五 二回一〇五
石川縣	インフルエンザ菌ワクチン	「イ」菌	二億個	一回〇・五五 二回一〇五
長崎縣	インフルエンザ菌肺炎球菌混合ワクチン	「イ」菌	各〇・二五	一回〇・五五 二回一〇五
東京府	インフルエンザ菌感受作ワクチン	「イ」菌	〇・五五	一回〇・五五 二回一〇五
大阪府	肺炎球菌インフルエンザ菌粘性連鎖状球菌ワクチン	「肺」菌 「連」菌	二千二百五十萬個 二百五十萬個	一回一〇五 二回一〇五
北里研究所	インフルエンザ菌感受作ワクチン	「イ」菌	〇・五五	一回〇・五五 二回一〇五
東京顯微鏡院	インフルエンザ菌肺炎球菌混合ワクチン インフルエンザ菌感受作ワクチン インフルエンザ菌感受作ワクチン	「肺」菌 「イ」菌 「イ」菌	各〇・二五 〇・五五 〇・五五	一回〇・五五 二回一〇五 一回〇・五五 二回一〇五 一回〇・五五 二回一〇五
天見研究所	インフルエンザ菌ワクチン	「イ」菌	一〇五	一回一〇五 二回一〇五
京都微生物研究所	インフルエンザ菌ワクチン	「イ」菌	〇・五五	一回〇・五五 二回一〇五

大阪血清製院	石神研究所	押田徳郎	名古屋病院附屬研究部	百瀬結核研究所	大日本製薬株式会社	大阪細菌研究所	日本血清化学研究所	足製薬株式会社
インフルエンザ菌アクチン	インフルエンザ菌加谷見性双球菌肺炎球菌混合ワクチン	インフルエンザ菌アクチン インフルエンザ菌肺炎球菌混合ワクチン インフルエンザ菌感作ワクチン	インフルエンザ菌肺炎球菌混合ワクチン	インフルエンザ菌アクチン	インフルエンザ菌肺炎球菌混合ワクチン インフルエンザ菌アクチン	インフルエンザ菌肺炎球菌混合ワクチン インフルエンザ菌アクチン	インフルエンザ菌アクチン	肺炎球菌菌苗肺炎球菌連鎖球菌インフルエンザ菌混合ワクチン
「イ」菌	「加谷見」菌	「イ」菌 「イ」菌 「イ」菌	「イ」菌	「イ」菌	「イ」菌 「イ」菌	「イ」菌 「イ」菌	「イ」菌	「イ」菌 「加谷見」菌 「連鎖球菌」 「肺炎球菌」 「肺炎球菌」 「肺炎球菌」 「肺炎球菌」 「肺炎球菌」 「肺炎球菌」 「肺炎球菌」
約一位個	五千個 三千個 五千個	〇・五瓶 各〇・二五瓶 〇・五瓶	〇・二瓶 〇・四瓶	一〇瓶	〇・五瓶 〇・五瓶	約一位個 約一位個 約二千個	一位五千個	五千個 一千個 二千個 五千個 一千個 五千個
一回〇・五瓶 二回一〇瓶	一回〇・三瓶 二回一〇瓶 一回〇・五瓶	一回〇・五瓶 二回一〇瓶 一回〇・五瓶 二回一〇瓶 一回〇・五瓶 二回一〇瓶	一回〇・五瓶 二回一〇瓶	一回〇・五瓶 一回〇・五瓶 一回〇・五瓶	一回〇・五瓶 二回一〇瓶 一回〇・五瓶 二回一〇瓶 一回〇・五瓶 二回一〇瓶	一回一五瓶 二回二〇瓶	一回一五瓶 二回二〇瓶	一回〇・五瓶 二回一〇瓶

備考 「イ」菌、「肺」菌、「連」菌及「加谷見」菌ハ夫々インフルエンザ菌、肺炎双球菌、粘液性連鎖球菌及加谷見性双球菌ノ略

二、流行性感胃豫防接種實施上ノ注意事項

一、禁忌

- 高度ノ心臓疾患
- 腎臓炎
- 脚氣
- 妊婦及産褥婦
- 重症肺結核
- 出血
- 高热

二、副作用

強度衰弱者、淋巴性體質ノ徵候アルモノ等
以上ノ場合ニハ注射ノ際特ニ注意スヘキナリ

豫防實施上屢々實施家ノ苦シム所ニシテ常ニ充分ナル考慮ナカルヘカラス。屢々現ルル注射後ノ反應ヲ上クレハ次ノ如シ

- 發熱 惡寒 腰痛 全身倦怠
- 下痢 腹痛 頭痛、耳鳴 蕁麻疹
- 衄血 食慾不進 惡心嘔吐 眩暈
- 其他

局所 疹痛 腫痛 發赤 腫脹 搔痒感

今我國ニ於テ使用セラレタル「ワクチン」ノ注射後ノ反應ニ關スル二三ノ報告ヲ見ルニ
混合「ワクチン」(インフルエンザ菌及肺炎双球菌) (傳染病研究所ニテ集メ)

注射後ノ反應アリシモノ

五一四例中

局所症狀輕度

一七四例

高度

四四例

發熱者

一八五例中

輕度ト記セラレタルモノ

一二八例

三八度ニ達セルモノ

三五例

高熱又ハ熱發ト記セラレタルモノ

二二例

頭痛

四七例

全身倦怠

三七例

食慾不振

一二例

惡寒

五例

下痢及痔麻疹

各三例

耳鳴

二例

惡心發汗

一例

要之混合ワクチン注射後ノ反應ハ局所及一般反應共ニ從來ノワクチンニ比シ頗ル輕微ナリト云フヲ得ヘシト

常岡良三博士他二名ノインフルエンザ菌ワクチンノ實驗ニヨレハ次ノ如シト

調査人員

三八四例

a. 局所反應

局部發赤

二二三例

腫脹

一六七例

緊張感

一六七例

壓痛

三〇六例

b. 一般反應

發熱 三一例内 三七度五分以下

二一例

三八度以下

三例

三八度五分以下

六例

三九度以下

一例

惡寒 二四例

頭痛 七三例

倦怠 一〇七例内數時間ニ止リタル者

二二例

一日内

三六例

二日以内

四六例

三日ニ亘レルモノ

二例

五日ニ達セルモノ

一例

其他眩暈、惡心、嘔吐、衄血、腋窩腺腫脹

各一例

局所反應ハ多クノモノニ於テ之ヲ認ルモ一般反應ハ之ヲ缺如セルモノ多ク而モ其徵候概ネ輕微ニシテ之カタメニ業務ヲ妨ケラレタルモノノ如キハ甚稀ナリ。唯三八四例中三例ニ於テ

三例三日一例五日三八度以上ノ發熱ヲ數日持續シタルモノアリ

第二回ノ注射後ノ反應ハ第一回注射後ニ比シ概シテ輕ク而モノノ發現%數著シク少シ但稀ニ第二回以後ニ於テ却テ強キ反應ヲ現セル例外ナキニアラスト云フ

北里研究所製インフルエンザ菌ワクチン注射後ノ反應(矢部專之助氏ニヨル)

淺野製鐵所事務員技師職工及其家族五人(女二五人)ニ向テ一回注射ヲ行フ(注射量〇.五c.c.ナリ)

局所壓痛 四人

注射即夜微熱感 二人

翌日休業セルモノ ナシ

東部鐵道管理局職員家族(皆二回注射)

第一回〇.五c.c.第二回一〇c.c.但第一回〇.四c.c.第二回〇.八乃至〇.九c.c.ノ者數名アリ、被注射者ニ小兒ナシ此中感作ヲクチンヲ注射セルモノ(二回共五九人加熱ヲクチンヲ注射セルモノ十九人ナリ)

七八人(全員)

第一回注射後ノ反應

三七度一分ニ達セルモノ加熱ニ一名アル他熱發セルモノナシ

局所疼痛 四人

頭痛 一人

腹痛 一人

全々無反應ナリシモノ 七五人

内 感作 五七人

加熱 一八人

第二回注射ノ時ハ第一回ノ場合ニ感作ヲ用ヒタル者ハ感作ヲ用ヒタリ、ソノ數第一回ト同シ

發熱三七二 一人

三七三 一人

三八二 一人(女)

コノ三者ハ皆局所ノ疼痛倦怠全身違和ヲ有セリ

無反應者 七五人

二回ヲ通シテ翌日休業セルモノナシ是發熱等ハ大抵數時間ニシテ既ニソノ頂點ヲ經過スルヲ以テナリ

慶應醫科大學看護婦 五四人

第一回 加熱 二四人

感作 三〇人

無反應者 一人(感作)

局所壓痛 四九人

發熱三八度 一人(加熱)

三七一至三七五度 六人(加熱)

六人(感作)

加熱	四九人
感作	二二人
發熱三七度以上	三七人
	二四人

三八乃至三八五度	八人(感三人、熱五人)
三七乃至三八度	一六人(感十人、熱六人)
自覺的無反應ナルモノ	一七人(感八人、熱九人)

要之ワクチン注射ノ反應ハ概シテ微弱ナルモ比較的著キ固性ノ差アリ、女子ニ於テハ男子ヨリモ一般ニ重キ反應ヲ呈ス、例三八度内外ノ高度者カ殆ト常ニ女子ナルニ徴シテ之ヲ知ルヘシ。「ワクチン」豫防接種ノ實施上第一ニ考フヘキコトハ注射ニヨリテ日常ノ職務ニ休業等ノ妨ヲ來スコトナリ。體質不良、夜業、一般衛生狀態不良等ハ殊ニ女工ノ如キニ於テハ屢々休業者ヲ出ス。例矢部氏ノ如キモ神戸鐘紡ニ於テ二〇%ノ休業者ヲ出セリ。然レトモ常ニカカル不良ナル成績ヲ得ルニアラスシテ現ニ同氏ハ他ノ工場看護婦事務員等ノ各種ノ階級ニ就テ經驗セル所ヲ綜合スレハ休業者ヲ出スコト甚少シト

以上諸家ノ報告ヲ見ルニ大體ニ於テ他ノワクチンニ比シ注射後ノ反應特ニ強烈ナリト云フコトヲ得ス、從テ本病ノ流行時ニ於テ豫防上ノ一手段トシテ廣ク一般的ニモ試ミ得ルモノタルハ明ナリ

三、流行性感置「ワクチン」ノ豫防的使用ニ就テ

抑々インフルエンザ豫防ノ目的ニ向ツテ「ワクチン」ヲ使用スルハ今回ノ流行ヲ以テ最初トナ

ス(一九一九年)

其注射成績ニ至テハ使用後日尙淺クシテ未タ充分ナル效果ノ判定ヲ下シ得ス要スルニ「ワクチン」ノ豫防的實施ハ尙試験的使用ノ域ニアリト云フヘシ。一方病原ニ關スル研究ヲ省ルニ今ナホ病原ニ就テ互ニ意見ヲ異ニシ或ハ未タ研究ノ途上ニアル學者モ多キ今日「ワクチン」製造ニ向テノ菌株選定ニ就テモ各區々タルハ蓋シ當然ノコトナリト云フヘシ。然レトモ甚シキニ至ツテハ何等學理的根據ナク氣道排泄物中ニ檢出セラレタル諸菌ヲ莫然蒐集網羅シ來リテ「ワクチン」ヲ製出シタル觀アルモノナシトセス

今試ニ「ワクチン」ヲ使用セル二三學者ノ試用的根據トスルモノヲ舉レハ次ノ如シ
長濱博士等ハ自家ノ實驗上ニ於テモ又他ノ諸家ノ病原ニ關スル報告ニ於テモ未タ根本的解決ヲ與フルニ足ルモノナク從テ其豫防方法ニ就テ絶對的確信ヲ以テ世ニ推奨スヘキモノ無シトナシ而テ大正八年末以來ノ再流行ニ際シ「インフルエンザ」菌肺炎双球菌混合「ワクチン」ヲ製スルニ至リシ理由トシテ一昨年來ノ流行ニヨリ得タル本病ノ細菌學的竝病理解剖學的所見ニ基キ現時兩菌ハ「インフルエンザ」患者ノ多數ニ於テ檢出セララルノミナラス殊ニ肺炎ノ場合ニ於テハ其症狀經過ニ關シ此兩菌カ正ニ看過スヘカラサル意義ヲ有スルモノタルハ多數學者ノ認ムル所タルト共ニ氏等モ亦之ヲ承認スル故他ニ適切確實ナル豫防ノ方法ナキ今日是等菌種ヲ用ヒテ「ワクチン」ヲ製シ之ヲ應用スルハ合理的處置ニシテ是氏等ノ混合「ワクチン」ヲ採用スルニ至ル所以ナリト云フ

且該混合「ワクチン」ヲ實際ニ應用シテ可及的嚴密ニソノ效果判定ニ向テ必要ナル條件ノ下ニ調査ヲ行ヒ相當ノ效果ヲ得タリト云フ

常岡氏等ノ豫防注射ニ關スル研究ニヨレハ氏等ハ先ニ病原ノバイフェル氏菌タルヲ確定シ動物實驗並本病恢復期患者血清ニ就テ明ニバイフェル氏菌ニ對スル抗体ノ發生ヲ證明シタルヲ以テ進テ積極的豫防法トシテ同菌ヲクチンヲ製シ第一回〇.五c.c.第二回一〇c.c.(大人)ノ割合ニテ接種ヲ試ミタリ

而シテ實驗的ニ人間ニ就テ補體綜合反應ニヨリテ抗体發現ノ存否ヲ試驗シ

第一回注射後七日目

被檢者 七三例中三五例四八弱

第二回後七乃至十二日

八六例中四九例五七弱

ニ於テ其發生ヲ見タリ。動物實驗恢復期患者血清ト同シク固體の差異ヲ見タレトモ此實驗的成績ヲ恢復期患者血清ノ補體結合反應ノ成績ト比較考察スルニ反應ノ強度並其發現%ニ於テ大體兩者略相匹適セルヲ見タリ。若シ今補體結合反應ニヨリテ證明シ得ヘキ抗体ノ多寡ヲ以テ實施免疫上ノ效果ヲ推定シ得ルモノトセハ氏等ノ豫防注射後ニ現ハルル免疫性ハ天然罹病後ニ於テ現ハルル免疫性ト略同シ程度ニアリト云フ可ク從テ本豫防注射ノ實際上ノ效果ハ亦天然罹病後再感ヲ免カレ得ル程度ニ及フ可キヲ推知スルニ足ラン。但シ是畢竟實驗的研究ノ結果ヨリセル推定ニ過キス。然レトモ氏等ハ相當ノ學理上ノ根據ニ立脚シテ豫防注射ヲ多數ノ人ニ實施シテ相當ノ成績ヲ舉ケツツアリ

北里研究所ニ於テハ先ツ第一ニ今次流行ノ「インフルエンザ」ノ病原ヲ研究シテ「バイフェル氏菌」ト決定シ直ニ豫防注射ノ基礎的研究ニ移リ幾多ノ動物試驗ヲ行ヘル結果「ワクチン」注射ニヨリ低度ノ免疫ノ動物體ニ發生スルコトヲ證明セリ。又「インフルエンザ」ニ罹レル患者ノ恢復期ノ免疫程度ヲ觀察セルニ之亦弱度ナリ。即「イン」ノ性質トシテ多量ノ免疫體ヲ産出シ難キハ明

ナリト雖一定度ノ免疫ヲ爲シ得ルコトハ動物實驗ニヨリテモ證明セラレタリ。之ヨリ進テ「イン」菌ヲ用ヒ豫防注射ヲ實際ニ行ハントシ既ニ大正七年末ヨリ大正八年春ニカケ、同所々員ヲ初メ數百人ノ希望者ニ豫防注射ヲ實施セリ。然ルニ其ノ成績比較的良好ナリシヲ以テ昨大正九年一月以降廣ク之ヲ實施セントスルニ至レリ

然レトモ「イン」菌ノ基礎的實驗ニ於テ「チフス」「ワクチン」「コレラ」「ワクチン」ニ於ケルカ如ク確實ナル成績ヲ舉ケ得サリシヲ以テ實際上ノ效果ハ如上ノ「ワクチン」ニ比シテ或ハ低キモノナラスヤトノ懸念ヲ有セリ

四、流行性感「ワクチン」注射效果判定ニ際スル注意事項

「インフルエンザ」ノ如キ特種ノ疾病ニ對シ豫防注射ヲ行ヒ確實ナル成績ヲ調査セントスルニハ次ノ如キ條件ヲ具備セシムルヲ要ス

一、注射實施前ノ流行ニ際シ罹病セシ者ハ之ヲ調査外ニ控除スルヲ要ス

蓋シ一度本病ヲ經過セルモノニハ或程度ノ免疫アルヲ以テナリ

二、時間的關係ヲ考慮スルヲ要ス豫防注射ハ少クモ流行一週日以前ニ行ヒ豫メ免疫ヲ完了セシメ置キ、カクテ後來ノ流行ニ對シテ幾何ノ抵抗ヲ示シ得ルヤヲ觀察セサル可ラス。豫防

注射ヲ流行開始後ニ始メタルモノハ本病ノ如ク一乃至二週間ニシテ其ノ流行ノ經過スルモノニ於テハ到底確實ノ成績ヲ與フルモノニアラス

三、場所的關係ヲ考慮スルヲ要ス

豫防注射ヲ受ケタルモノト受ケサルモノトヲ比較スル場合兩者カ同一區域内ニ生活スルモノナラサル可ラス、即チ本病ノ如ク交通性傳染病ニ於テ交通セルモノハ病毒ニ感染シ易

キモノナレハ一般人ニ就キ屢々外出スルモノト屋内ニ生活スルモノトヲ區別セシテ調査スル時ハ誤レル判断ヲ下スニ至ル可シ(北島博士ニヨル)

長與博士ノ如キモ統計上ニ現ハルル數字ハ種々ノ複雑ナル關係ニヨリテ左右セララル所頗ル多ク從テ幾多ノ條件ヲ顧慮スルノ必要アリトナシ殊ニ被接種者ノ年齢、體質、職業、居住ノ場所、注射ノ時期即チ流行前ニ行ハレタルカ或ハ流行中若クハ流行ノ末期ニ於テ行ハレタルカノ點又ワクチン使用ト同時ニ他ノ豫防法例之「マスク」ヲ使用、含嗽、隔離及外出集合ノ有無等ヲ精査スル外、全國一般及注射施行ノ地方ニ於ケル流行ノ狀態罹患者數ノ比ヲモ詳ニセサルヘカラス、加之前年度ノ罹病ハ一定ノ免疫ヲ貽スヲ以テ特ニ此ノ點ニ關スル調査ハ「ワクチン」注射成績ノ判定上等閑ニ附ス可ラサルハ勿論ナリト

五、流行性感胃「ワクチン」ノ豫防的效果
適當ナル報告ハ甚タ少キモノニシテ今其ノ主ナルモノノ數例ニヨリ效果ノ概況ヲ見ルニ次ノ如シ

(A) 例 G. W. Mc Coy 氏ニヨレハ使用セル「ワクチン」ハ市俄古衛生局研究所長エフホトンネー氏ノ製造ニヨル混合「ワクチン」ニシテ其ノ一ccニ含有スル菌株及菌量ハ次ノ如キモノナリ

肺炎双球菌	第一型	五億個
	第二型	五億個
	第三型	五億個
	第四型	十五億個

溶血性連鎖狀球菌	十億個
黄色膿膿性葡萄狀球菌	五億個

之ヲ〇.五cc.一〇cc.一五cc.宛四十八時間置キニ注射ス

「ワクチン」注射ヲ受ケタルモノハ療養所ノ患者ニシテ年齢ハ四十一歳以下ノモノヲ選ビ被注射者及對稱ニ區別シテ各總計三九〇名宛トナシタリ

注射ノ時期ハ十一月十五日ニ注射ヲ終リ周圍ニ於テハ大體流行終熄ニ近シ。十一月二十六日ニ於テ初發患者ヲ出セリ而シテ十二月九日迄ノ成績ヲ見ルニ左ノ如シ

人員	罹病者	肺炎ヲ併發セル者	死者
注射ヲ受ケシ者	三九〇	一一九	二三
注射ヲ受ケサルモノ	三九〇	一〇三	一七
			七

以上ノ結果ニヨリ「ワクチン」ハ無効ト斷定セリ

(B) リーリー氏「ワクチン」ニ「インフルエンザ」菌「ワクチン」ノ豫防的效果(ハリー、リー、バーンス氏ニヨル)

使用セル「ワクチン」ハ「インフルエンザ」菌ヲ一cc.ニ八億個含有スルモノニシテ之ヲ二十四時間ノ間隔ヲ以テ第一回〇.五cc.第二回一〇cc.第三回一五cc.皮下ニ注射セリ

注射セル人ハ療養所ノ患者及雇人ニシテ注射ノ時期ハ一九一八年九月下旬四名ノ雇人ト五名ノ患者ニ「インフルエンザ」ノ發生ヲ見タルモ病院ノ或ル區域ニ屬スルモノニシテ流行地ヨリ來リシ患者ヨリ傳染セルコト明ナリシ故其ノ區劃ノ一部ニ隔離シ尙九月二十九日ヨリ患者並ニ雇人ヲシテ面會人ニ接スルコトヲ嚴禁セル爲外部ニ於テ流行ノ極期ニアリシ

ニ拘ラス當療養所ハ罹病ヲ免レタリシカ十月十日一患者入院シ十四日ニ其ノ傍ニ臥セル患者ニ傳染シ二十二日ヨリハ男子ノ患者ニ傳染シ遂ニ四五乃至四〇%罹病スルニ至レリ此ノ二十日ニリリー氏ヨリワクチンノ分與ヲ受ケ未タ罹病セザリシモノノ約半數一五二人ニ注射シ後ノ半一一人ハ注射ヲ受ケスシテ終レリ
其ノ結果ハ次ノ如シ

	總數	罹數	百分率
注射ヲ受ケタルモノ	一五二	二五	一六
注射ヲ受ケザル者	一一三	二二	二〇

一、但シ注射ヲ受ケタルモノノ中小兒三十二人ハ初メヨリ隔離セル爲メ罹病者一人モナカリシヲ以テ之ヲ控除スル時ハ注射ヲ受ケタルモノノ罹病百分率モ亦二〇%トナル
二、尙一名ノミ發病シ直ニ隔離セル病舎二棟ノ患者ヲ危險少カリシモノトシテ控除スル時ハ注射ヲ受ケタルモノハ罹病率二六%トナリ注射ヲ受サルモノハ三四%トナル
三、注射ヲ受ケテ死亡セルモノハ一六%ニシテ注射ヲ受ケス死亡セルモノハ一五・八%ナリ即チ罹病率ハ注射ヲ受ケタルモノニ稍少キ感アルモ死亡率ハ兩者ニ於テ差異ヲ認メス

(C) 英國軍隊ニ於ケル豫防注射成績(一九一八—一九一九年)

最初用キタル「アタチン」ハ其「C」中ニ「インフルエンザ」菌六千個連鎖狀球菌八千個肺炎双球菌二億個ヲ含マシメシカ「インフルエンザ」菌ノ重要ナルヲ知リシ結果更ニ「インフルエンザ」菌ヲ四億ニ増量シ「アタチン」ヲ製シ用キタリ。上表ニヨルハ豫防注射ニヨリ發病率ハ三分ノ一強ニ、肺炎併發率ハ約八分ノ一死亡率ハ九分ノ一ニ減シ其效果ハ頗ル偉大ナルモノノ如キモ效果判定條件ヲ無視シテ統計ヲ取リタルモノナレハ之ヲ以テ直ニ「アタチン」ノ效果ヲ判斷スヘキニアラス

英國軍隊ニ於ケル豫防注射成績一九一八—一九一九年

(大正九年二月二十一日倫敦通信ニヨル)

總人口	注射ヲ受ケタルモノ	注射ヲ受ケザルモノ
一五、六二四	四三、五二〇	四七、三三%
罹病率	一四・一%	一三・三%
肺炎併發率	一・六%	二・二五%
死亡率	〇・二%	

(D) 次ニ北米合衆國ニ「ニューオールン」市ニ於テ一九一八年ノ流行ニ際シ「ドクトル」シ「ニューズ」氏カ「インフルエンザ」ヲ「アタチン」(一莖中ニ「インフルエンザ」菌十億個ヲ含ム)ヲ用キテ行ヘル豫防注射ノ成績ハ左ノ如シ

患者數	罹病率	注射ヲ受ケタル者				計
		一回	二回	三回	計	
八六六	四一・六%	一一八	三四六	二六〇八	三〇七二	
三七五	二四・二%	二九	二八	四五	一〇二	
		二四%	八%	一・七%	三・三%	

此ノ表ニヨレバ三回ノ注射ニヨリテ罹病率ハ二十四分ノ一ニ減シ一回ノ注射ノミニヨリテモ約三分ノ一トナリ英國軍隊ニ於ケル例ニ比シ更ニ一層「ワクチン」ノ效果偉大ナルノ觀アリ。但シ此ノ場合ニ於テハ肺炎ノ併發率及死亡率等ニ就テ記載ナキヲ以テ輕症ノ流行ナリシトモ考ヘラル。如上ノ例ニ於テハ前回ノ流行ニ際シ罹患ノ有無ニ就テ何等記載ナキヲ以テ此等ノ統

計ニヨリ漫然豫防注射ノ效力ヲ判定スルカ如キアラハ誤ヲ來スヘシ
(E) 北里研究所ニ於テ調査サレタルモノ次ノ如シ(北島博士ニヨル)

1. 條件ヲ具備セル場合ノ調査成績

次ノ豊田紡績及菊井紡績ノ二例ハ流行開始前ニ豫防注射ヲ完了シタルモノニシテ人ヲ派シ
テ直接調査シタルモノナリ。(北里研究所製「インフルエンザ」菌「ワクチン」一c.c. 〇・五瓩)
一、豊田紡績會社内寄宿舎工女ノ總人員二千五百十九人中注射ヲ行ヘルモノニシテ其ノ成績ハ
次ニ示スカ如シ

第一表 豊田紡績工場ニ於ケル豫防注射ト患者及死者

工女	患者	肺炎併發者	死者	罹病百分比	患者ニ對スル死亡百分比	總人員ニ對スル死亡百分比	内			未注射者
							一回	二回	内	
二五一九	六三	七	四	二・五	六・三	〇・一五	一五二	二二〇	二二〇	二二七
一五二	一〇	二	一	五・八八	一〇・〇〇	〇・六五	二二〇	四・七〇	一〇・〇〇	四・二二
二二〇	四三	三	二	二・一九	四・七〇	〇・〇九	二二〇	二・一七	一〇・〇〇	一〇・四二

二、菊井紡績工場宿舍工女千八百五十人ニシテ中千六百十五人ハ注射ヲ受ケ二百三十五人ハ注射ヲ受ケサルモノナリ其成績左ノ如シ

第二表 菊井紡績工場ニ於ケル豫防注射ト患者及死者

工女	患者	肺炎併發者	平均治療日數	死者	罹病百分比	患者死亡百分比	總人員ノ死亡百分比	内			未注射
								一回注射完了	二回注射完了	内	
一八五〇	一四六	八・一	八・一	四三	七・四九	三・四〇	〇・二七	四四七	二六	一六八	二三五
四四七	二六	八・一	八・一	一〇	五・八二	三・八〇	〇・二〇	二二六	七・二	七・八	四二
一六八	七八	七・二	七・二	一七	六・八	二・五	〇・一七	一六八	一七	一七・八七	一七・八七

豫防注射ニヨリテ豊田紡績工場ニ於テハ患者發生率ヲ二分ノ一ニ減シ、菊井紡績工場ニ於テハ三分一弱ニ減シタリ。又肺炎併發ノ割合モ注射ヲ受ケシモノハ注射ヲ受ケサリシモノニ對シ二分ノ一内外ニ減シ死亡率ニ於テモ亦約半減セリ。尚菊井紡績工場ニ於テ治療シタルモノニ付治療平均日數ヲ見ルニ注射ヲ受ケタルモノニ於テハ七・二日。非注射者ニ至リテハ九・一日ナリ。即チ豫防注射ニヨリテ約二日ヲ短縮シ得タルナリ。之ヲ要スルニ「インフルエンザ」菌「ワクチン」注射ニヨリテ發病數ヲ減スルハ勿論肺炎併發率ヲ減シ、又死亡率ヲ減ス、是レ肺炎ハ第二次性合併症ナルヘケレハナリ

II. 流行時ニ行ヘル豫防注射成績

生活狀態ノ一定セル區域ニ於テ既ニ流行ノ初レル場合ニ行ヘル豫防注射即チ時間的條件ノ

具備セザリシ實例ヲ左ニ舉クヘシ。茨城縣下日立鑛山ニ在リテハ大正九年春、インフルエンザノ流行アリ、其ノ期間ハ九週間ニ涉リ、初ノ五週間ニ於テ大多數ノ患者ヲ出セリ、流行ノ始レル後一週間ニシテ豫防注射ヲ開始シ、流行ノ頂點タル第五週ニ至ル迄ニ之ヲ完了セリ、此ノ場合ニ於ケル調査成績左ノ如シ

大正九年日立鑛山ニ於ケル流行性感冒豫防接種成績

患家、族 内 死者 罹病者 罹病者死亡 對死亡%	總數	内		
		一回接種者	二回接種者	未接種者
二九六二	二九六二	二九六	八二一	一八四五
九五九	九五九	九四	六〇	八〇五
五九	五九	三	一	五五
三二・四	三二・四	三一・七	七・三	四三・六
六・二	六・二	三・二	一・七	六・八
一九・九	一九・九	一〇・一	一・二	二九・八

日立鑛山ニ於ケル流成患者中肺炎併發者表

罹患者 罹患者中肺炎併發者 肺炎併發者中死亡者	未接種	接種		計
		一回	二回	
八〇五	八〇五	一三三	一一五	一〇五二
一三〇	一三〇	一一	八	一四九
五二	五二	三	一	五六

罹患者ニ對スル肺炎併發者ニ對スル死亡百分比	未接種	一回	二回	計
一六・二	一六・二	八・三	七・〇	一四・二
四〇・〇	四〇・〇	二七・二	一二・五	三七・六

右表ニ依レハ二回注射ニヨリテ其ノ發病率ハ六分ノ一ニ減シ肺炎併發ノ割合ハ二分ノ一ニ、又死亡率ハ四分ノ一ニ低下シ、其ノ結果ハ名古屋ニ於ケル二紡績工場ノ場合ニ比シ著シク良好ノ統計ヲ示セリ。但日立鑛山ノ場合ニアリテハ豫防注射ヲ流行ト同時ニ行ヘルモノナレハ之ヲ以テ直ニ豫防注射ノ確實ナル効力ト速斷スヘキモノニアラス

(F) 海軍省醫務局ニ於ケル調査左ノ如シ

「流行性感冒豫防接種ノ効果ニ關スル統計的觀察」ナル題下ニ海軍省醫務局ヨリ報告セラレタルモノヲ見ルニ統計材料大正十年一月末日迄ニ到着シタル分ヲ取捨整理シタルモノニシテ主トシテ大正八年十二月乃至大正九年二月ニ亘ル流行ヨリ材料ヲ採擇シ參考資料トシテ其ノ後ニ於ケル材料ヲ加ヘタリ。可及的同一條件ノ下ニ豫防接種(北研製「イ」菌豫防液、海軍部内製「イ」菌肺炎双球菌混合「フクチン」ヲ用ヒタリ)ノ行ハレタル材料ニ就キ調査シ結論トシテ次ノ四項ヲ舉ケタリ

- 一、流行性感冒接種ノ效果ハ未タ之ヲ確認シ難シ
- 二、流行性感冒ニ對スル豫防接種ノ効果ハ流行ノ發起シタルニ及ンテ行フ時ハ往々不良ナルコトアリ
- 三、豫防接種ヲ完了シタル場所ニ於テモ時トシテ同病流行ヲ來ス
- 四、前項ノ場合ニ於ケル流行狀況ハ接種ヲ行ハサル場合ト異ラサルコト多シ

(G) 常岡氏等ハ流行ト注射トノ時間的關係前同流行時ノ罹患有無(免疫)マスク含嗽キニーネ内服等他ノ豫防法ヲ行ハサリシヤ否ヤニモ注意ヲ拂ヒテ一方調査書ニヨリ又一部ハ自ラ京都醫學專門學校學生二百六十六人ニ就テ豫防注射成績ヲ調ヘタリ。「インフルエンザ」菌「ワクチン」C.C.中二億萬第一京都醫學專門學校學生(流行ノ比較の早期ニ注射ヲ行ヘルモノナリ)

總數	注射ヲ受ケシ者	注射後「インフルエンザ」菌ノ數		不注射者	「インフルエンザ」菌ニ罹レルモノ	
		實數	百分比		實數	百分比
二六六	一一九	×	二	一六八	一四七	××
						一〇
						六・八〇

×一回注射後罹病セルモノヲ除ク

××第二回注射當日以前罹病セルモノヲ除ク

第二京都五條警察署管内

同署長調査(大正九年三月一日)

總數	注射者	罹病者		不注射者	罹病者	
		實數	百分比		實數	百分比
五五三三九	一五、八一七	二四二	(五)	一、五三三	(〇・〇三三)	三九、五二二
						二、三三三
						(一九〇)
						(〇・四八)

()ハ死者

注射ヲ受ケタル者ノ罹病率及死亡率ヲ注射ヲ受ケタルモノノ夫等ニ比較スルニ罹病率ニ於テ三八倍強、死亡率ニ於テ十五倍ノ多數ヲ示セルヲ見ル。氏等ハ非専門家ニヨリテ行ハレタルコノ第二表ノ統計調査ニハ必スシモ重キヲ置カントスルモノニアラサルモ略大勢ヲ窺フニ足ラントセリ

(H) 傳染病研究所ニヨル調査

傳染病研究所ニ於テハ各地病院、醫師、市町村役場、警察、學校等、ワクチン使用者ニ調査書ヲ配布シ被注射人ノ數、職業、居住地方名、ワクチンノ種類、用量、注射ノ時期及注射後ノ罹患數、罹患輕重、注射後發病迄ノ日數其他ニ就キ回答ニヨリ調査シタリ、大正九年三月二十七日迄ノ回答ヨリ得タル成績左ノ如シト

第一表「インフルエンザ」菌肺炎双球菌混合「ワクチン」注射(傳染病研究所製)ト其罹病率

罹病者	總數	輕症	中等	重症	不罹患者	一回注射		總計
						實數	百分比	
被注射人總數	六、三九九				六、二九六	四五、三二〇	五一、七〇九	甲
計死	一〇三				七九	七九	(一九、二八三、四八一)	乙
症	七五	一七二	一八四	五八四	四四、五一九	五〇八一五	五〇八一五	甲
症	一一二	八六	九七	一八四			(一九、二八三、四八一)	乙
症	一一	二四	二七	九七			(一九、二八三、四八一)	乙
症	五	七九	八四	二七			(一九、二八三、四八一)	乙
甲	甲一一・六%	甲一一・七%	甲一一・七%	甲一一・七%	甲一一・七%	甲一一・七%	甲一一・七%	甲
乙	乙一一・六%	乙一一・七%	乙一一・七%	乙一一・七%	乙一一・七%	乙一一・七%	乙一一・七%	乙

備考 甲ハ集マリタル數其位 乙ハ粗雜ナル報告ニヨルモノヲ控除シタル數ヲ示ス

(表中) 輕症 (有熱期間二三日ノモノ)

中等症 (有熱期間一週内外ニ及フモ發熱一般ニ高度)

重症 (有熱期間一週間以上ニシテ發熱高度ノモノ又ハ臨床的ニ明ニ肺炎ノ症狀ヲ)

第二表 傳染病研究所製混合ワクチンノ注射ヲ受ケタルモノト「ワクチン」注射ヲ受ケサルモノトノ罹患者中症狀輕重ノ比較
 (表中輕、中、重症トアルハ第一表ニ於ケルト同意義ナリ)

流 行	注 射 回 數		注 射 後 發 病 日	被 調 査 人 員 不 罹 患 者	注 射 回 數	注 射	注 射	注 射 者 計	不 注 射 者 計
	第 二 回	一 回							
死 亡	0	2	1-3	83	1-3	4-7	1-1	2-1	3-4
	0	0	4-7		4-7	8-11	1-1	3-3	3-6
中 症	0	2	8-11	83	8-11	12-16	1-3	2-2	3-4
	0	0	12-16		12-16	17-21	4-5	3-3	3-6
輕 症	0	2	不明	83	不明	22-27	22-27	28-33	34-38
	0	0	計		計	34-41	42-51	42-51	42-51
%	0	2	%	83	%	%	%	%	%
	0	0	%		%	%	%	%	%
罹 患 者 數	0	2	1-3	83	1-3	4-7	8-11	12-16	17-21
	0	0	4-7		4-7	8-11	12-16	17-21	22-27
%	0	2	計	83	計	%	%	%	%
	0	0	%		%	%	%	%	%
罹 患 者 數	0	2	1-3	83	1-3	4-7	8-11	12-16	17-21
	0	0	4-7		4-7	8-11	12-16	17-21	22-27
%	0	2	計	83	計	%	%	%	%
	0	0	%		%	%	%	%	%

本表ハ調査ノ性質上罹患者ニ重キヲ置キテ報告セラレタルモノナルヲ以テ一般罹患者ヲ論スルヲ得サレトモ罹患者ノ輕重ノ比ニ關シテハ少數乍ラ尙多少ノ傾向ヲ窺フヲ得ン。即
 被注射人ニシテ注射後罹病セルモノ
 一九二名中
 輕症 九五 四九五%
 中等症 五四 二八一%

注射ヲ受ケサリシモノ
 罹患者一、三九五名中
 重症 三八 一九八%
 死亡 五 二六%

輕症 四八六 三四八%
 中等症 三八九 二七九%
 重症 四一〇 二九四%
 死亡 一一〇 七九%

重症者及死亡者カ被注射者ニ於テ著シク少數ニ在ルコト頗ル注目ニ値スル點ナルヘシト
 (1)石原房雄博士ニヨリ發表セラレタル東京帝國大學衛生學教室ノ調査ニヨレハ氏等大體
 マツクコローイ氏ノ形式ニ從ツテ調査シタルモノニシテ其成績左ノ如シ(連鎖球菌ヲ含ム混合
 「ワクチン」混合「ワクチン」肺炎球菌、イ菌、ワクチン等混合セルモノノ成績ナリ)
 (大正九年七月十日醫事新聞ニヨル)

「ワクチン」 注射セシモノ	第二流行時罹患セサリシモノ 本月一日以後ニ罹患セシモノ 同上ノ内肺炎患者 昨年十二月末日迄ニ罹患セシモノ 同上ノ内肺炎患者	五、三八九 其罹患者 六五一 其罹患者率 一〇・八%
「ワクチン」 注射セシモノ	同上ノ内肺炎患者 同上ノ内肺炎患者	五七 五七 二四七 二〇
「ワクチン」 注射セシモノ	同上ノ内肺炎患者 同上ノ内肺炎患者	八九八 八六六 七七
「ワクチン」 注射セシモノ	同上ノ内肺炎患者 同上ノ内肺炎患者	三三 一八一
「ワクチン」 注射セシモノ	同上ノ内肺炎患者 同上ノ内肺炎患者	七・六%
「ワクチン」 注射セシモノ	同上ノ内肺炎患者 同上ノ内肺炎患者	一四・三%
「ワクチン」 注射セシモノ	同上ノ内肺炎患者 同上ノ内肺炎患者	八・六%
「ワクチン」 注射セシモノ	同上ノ内肺炎患者 同上ノ内肺炎患者	一一・八%

「ワクチン」効果ニ就テ見ルニ「ワクチン」不注射者ノ罹病率一四・三%ハ注射者ノ罹病率七・六%ノ

二倍ヲ示セリ。コレ一見、ワクチンノ効果ニヨリ流威罹病ヲ半減セルカ如ク見ユルモ、一四・三%ノ中、ワクチン注射以前ニ罹病セシモノヲ減スレハ一〇・八%トナリ更ニ、ワクチン注射中ニ罹病セシモノヲ減スル時ハ兩者ノ罹病率ノ差愈少クナルヘク或ハ全クナキカ如ク思ハルルモノナリ

尙、ワクチンノ効果ヲ論スル場合注意スヘキ事項トシテ流威ハ看護治療ノ方法如何ニヨリ肺炎併發率ノ差大ナルコト注射時ノ周圍流行狀況、注射ト流行ノ時期トノ關係等ニ注意ヲ拂ヒ其ノ均等セル要約ノモトニ相互ニ比較スヘキコト必要ナリト

大正八年四月十九日「ランセツト」所載、歐洲通信ニヨルハ

流行性感胃ノ豫防施設トシテ聯邦防疫部ハ混合ワクチンヲ製造シ一般使用ヲ發進セリ。一般ノ好尚ニ投シ「ワクチン」ハ廣ク使用セラレタルカ今日ハ其全ク無効ナルコト明トナレリ。且天主教孤兒學校ニ於テ注射後第六日ニ突然ニ二百名ノ兒童中百十二名ノ發病ヲ見タル奇怪現象ニ遭遇セリト云フ

流威「ワクチン」ノ效果ノ總括

「ワクチン」ノ豫防的効果判定ニ必要ナル諸條件ヲ完備セル上述數例ノ成績ヲ見ルニ混合「ワクチン」ニ就テ實驗シタルマツクコイ氏ハ認ム可キ効ナシト斷言シ、マツクコイ氏ニ從テ統計シタル石原氏モ無効ナルヘシト云ヒ、インフルエンザ「菌」ワクチンヲ用ヒタルリリー氏ニヨレハ罹病率ノ減少ヲ見タルモ死亡率ニハ變リナシト述ヘタリ。傳染病研究所ノ調査ニヨレハ重症者死亡者ノ減少ヲ示シ、北島博士ノ「インフルエンザ」菌「ワクチン」北里研究所注射成績ヲ見ルニ發病率ヲ二分一ニ減シ之ト同時ニ肺炎併發率及死亡率ヲモ亦二分一ニ減シタリ

常岡博士等ノ「インフルエンザ」菌「ワクチン」注射成績ニヨレハ罹患率ノ減少ヲ示シツツアリ

六、流行性感胃「ワクチン」ノ今後ノ使用ニ就テ

何種ノ「ワクチン」ニ限ラス實施上先ツ難易ニ關スル問題ハ第一注射後ノ副作用ト第二注射ノ豫防的効果ナリ

第一副作用

流行性感胃豫防「ワクチン」ハ混合「ワクチン」タリト「インフルエンザ」菌「ワクチン」タリトヲ問ハス前述諸家ノ實驗ニヨレハ今日マテノ量ニテハ幸ニ其副作用ハ微弱ナリ依テ易ク之ヲ一般的ニ使用シ得ルコトハ明ナリ

第二效果

以上諸家ノ實驗ニヨレハ「ワクチン」注射ノ豫防的効果ハ或ハ全ク無シト云ハレ或ハ多少ノ效力ヲ認ムル者アリ少クトモ我國ニ於テ行ハレタル信頼スヘキ一二ノ成績ヲ見ルニ今日迄用ヒラレタル注射法及注射量ニヨリテ既ニ認ム可キ効ナシトセス然レトモ一層明ニ其效果如何ヲ知ラント欲セハ今後ナホ適當ナル多數ノ實驗例ヲ待タサル可ラス

既ニ行ハレタル「ワクチン」ノ豫防的使用ニ向ツテハナホ本病病原ノ研究ソノ途上ニアル爲充分ナル學理的根據ヲ有セサルモノアリ

故ニ第一菌株ノ問題第二菌量ノ問題ニ就テ各其基礎的實驗ヲ完成シタル曉ニ於テ行ヘル確實ナル豫防注射成績ノ報告ニ接スルコトハ希望シテ止マサル所ナリ

本問題ハ現ニ多數ノ研究者ニヨリテ注意サレ且又研究サレツツアル所ナリ

先ニ病原ヲインフルエンザ菌ト確定シタル北里研究所ハ進テ免疫發生ノ度ト密接ノ關係アルワクチンノ含有スル菌量ニ著眼シツテ豫防注射成績ヲ批判セントシツテアリ。又我陸海軍ニ於テ混合ワクチンヲ用ヒ行ヘル豫防注射成績ハ豫期ノ如ク良好ナラスト云フ故ニ本年ハ之等増量シテ試用スル方針ヲ取レリト云フ。傳染病研究所ニ於テモ増量ニ就テ相當ノ注意ヲ拂ヒツツアリ

更ニ大正九年一月ノ倫敦通信ニヨレハ英國衛生省ニ於ケル醫事調査委員會ノ意見ハ前年度ノ官製ワクチンハバイエル氏菌少キニ過キタルカ如ク若シ該菌ヲ主要ナル要素ト見テ其含有量ヲ増加スル時ハ一層有效ナルヘシト云フニ一致セリト云フ

- 「ワクチン」以外ノ豫防注射材料トシテ試ミントセラレ又既ニ試ミラレタルモノ一二アリ
- 一、患者喀痰浸出濾過液
- II. I. K. (Carl Spengler)

第三項 含嗽

含嗽ノ主要ナル目的ハ口腔鼻咽腔ヲ清潔ニ保ツニアリ
普通用ヒラルモノハ微温湯水、食鹽水、硼酸水(二%)、鹽剝水(二%)等ナリ。英國ニテハ五千倍ノ過マンガン酸加里水ヲ以テ鼻咽腔ヲ洗滌スルコトヲ以テ個人的衛生法ノ一ツトシタリ。然レトモ餘リ頻々タル含嗽ハ防禦作用ヲ有スル粘液ヲ粘膜面ヨリ取り去ル故ニ合理的ナラスト云フモノナシトセス

Miller 及 VIII. Waldeck (Med. Klin. 1919, S. 410) ニヨレハ疑ハシキ時ハ扁桃腺ニ沃度丁幾ヲ塗布スヘシ。過敏ノ人ニハグリセリンヲ混和スヘシト

尚フオルマリント「グアヤコール」ヲ濃縮セル産物 Epidosin モ可ナリト云フ

第四項 「マスク」

流行性感冒豫防法ニ向テ一般衛生法ノ他「ワクチン」注射、含嗽ト共ニ廣ク用ヒラレタル豫防方法ニシテ其ノ目的ニ向テノ眞價ヲ判定スルハ寧ろ容易ニアラサルヘシ

然レトモ實際ニ廣ク使用セラレタル經驗ノ致フル所ハ第一適當ナル使用、第二「マスク」ノ構造ニ就キ今後注意スヘキコトナリトス

一、「マスク」ノ使用並構造ニ就テ

加州衛生局報(一九一九年八月ケロウグ氏)ニヨレバ「ガーゼ」マスクハ加州ノ多クハ都市ニ於テ一般ニ用ヒラレ且桑港沿岸ニ於ケル最初ノ使用ヲ以テ知ラル。桑港ニ於テハ法令ヲ以テ「マスク」使用ヲ實施スルニ當リ。之カ効果如何ニ對シテハ興味ヲ以テ迎ヘラレ、豫防上ノ効果大ナルヘキモ到底一般ニ實行セラレサルヘシトノ豫期ニ反シヨク一般ニ用ヒラレタリ。然ルニ本病ノ防遏ニ向ツテハ何等ノ効果ヲ見サリシト云フ。同州衛生局報ノ報スル所ニヨレハ強制的「マスク」着用ニ當リ次ノ如キ障害ノ現ハルヲ見タリ

一、鼻孔又ハ口ノミヲ覆ヒ或ハ「マスク」ヲ掛ケテ喫煙シタルモノアリ

二、自動車ニ乘リタル時町ヲ歩行スル時等人目ニ付ク所ニテ着用シ(實際夫レ程着用ノ必要ナ

キ場合)